【特集／空き家・空き地とソーシャルデザイン】

「ごちゃまぜ」の理念で拓く地域の新たな可能性

――社会福祉法人佛子園の挑戦

インタビュー

雄谷良成

Ooya Ryousei

［社会福祉法人佛子園理事長・公益社団法人青年海外協力協会会長］

地域空洞化の象徴とされる空き家・空き地は、一方で再生への「資源」となり得る。その可能性を大きく花開かせているのが、石川県白山市に本部を置く社会福祉法人佛子園の活動だ。無住の寺のリノベーションや、市街地の金沢・人口減の進む輪島の遊休不動産を活用した施設で、障がい者就労、高齢者介護、子育て支援や住民交流など、多様な課題への複合的対処を通じ、福祉と地方創生一体の豊かな変化をもたらしている。核となる「ごちゃまぜ」の理念をはじめ、空き家・空き地を拠点としたまちづくりについて、同法人の理事長を務める雄谷良成氏に幅広くお話をしていただいた。

聞き手＝弘本由香里（大阪ガスネットワーク㈱エネルギー・文化研究所研究員）

「B's行善寺」内の「住民自治室」にて。ずらりと並んだMyカップは、地域住民の施設への愛着を物語るものだ。

脇坂敦史＝構成
増田智泰＝撮影

左／「三草二木　西圓寺」の外観。右／近所の子どもたちも気軽に訪れる「三草二木　西圓寺」。カウンターでは高齢者も交え、おしゃべりに花が咲く。写真提供／佛子園

――福祉を核として、地域の人にとって居心地のよい場所を生み出し、活気あるまちづくりを実現させている社会福祉法人佛子園のソーシャルイノベーションに注目が集まっています。現在に至る、雄谷さんの活動の原点からお話しください。

雄谷　私自身、祖父・雄谷本英が1960年に開いた知的障がい児入所施設（石川県白山市）で、園児らと寝食を共にしながら育ちました。住職でもあった祖父が、戦災孤児や知的障がい児を寺で預かったのがその始まりです。当時、日本の社会はどんどん豊かになり、大量消費の時代へ突き進んでいましたが、昔ながらの大部屋での生活はプライバシーも自由もないもので、当時は私もそれが当たり前と思っていました。でも、学校に上がる頃からは、少しずつ障がい児と自分を隔てる壁や矛盾にも気づきましたし、そこで暮らす「当事者」としてのモヤモヤも感じるようになります。そのあたりに、現在の自分につながるきっかけがあったとは言えるでしょう。

――大学では福祉や教育を学ばれ、卒業後に青年海外協力隊としてドミニカ共和国に赴任されました。どのような動機から、何を学び、体験されたのでしょう？

雄谷　大学では既存の理論中心のカリキュラムに物足りなさを感じました。そんな時に開発途上国で障がい者教育の指導者を育成するプログラムを見つけ、より生活に密着した体験ができるのではと感じたんです。実際に暮らしてみると、当時のドミニカ共和国は技術や制度もキャッチアップ段階で、差別的な言動もあり、人権意識も高いとは言えません。しかし、住民が寄り添って助け合いながら暮らす点に学ぶべきところも多く、いい意味でゆるい「ラテン的」な幸せ観に目を開かされました。障がい者福祉の世界では、CBR（Community-based Rehabilitation: 地域に根ざしたリハビリテーション）と言いますが、逆に言えば、あるもののなかで組み立てるしか方法がないということ。そこに、制度としての福祉ではカバーできない、人が関わることで生まれるエネルギーがあると気づいたのです。

障がいに対する社会の偏見に挑んで始めた地ビール醸造

――1998年に佛子園が石川県北部の能登町に開設した「日本海倶楽部」は、障がい者の入所・就労施設でもある地ビールのブルワリー（醸造所）とビアレストランが成功し、話題となりました。障がい者の自立と地域の活性化というテーマが、その頃からあったのですね。

雄谷　地ビールづくりは、障がいのある人が社会的に「役に立たない」とレッテルを貼られることへの抵抗感から、「そうではない」と証明したい気持ちで始めました。今思えば、若さゆえの気負いもあったかもしれません。障がい者も、税金を使った社会保障を享受するだけではなく、酒税という形で税金も払える存在になれるんだというのを示したかった。

でも「日本海倶楽部」をつくったのは、それだけが理由ではありません。風呂は一斉に入るとか、起床も消灯も食事も全部決められ、選択肢やプライバシーがないことへの不満も含め、かつて自分が暮らした入所施設のリアルな体験から、「もっとこうしたい」という思いを形にする。そこで、当時は珍しかった木造建築にもこだわり、現在のプライバシー重視や個室化の流れも先取りするような施設を

左／デッキテラスが建物同士をつなぐ、遊び心に満ちた「B's行善寺」。中／施設内の温泉「海の湯」「山の湯」と「行善寺やぶそば」は地域の住民で常ににぎわう。右／同じく施設内にある「ゴッチャ！ウェルネス白山」のスタッフ、山本千咲さんは「皆と一緒に働けるのがうれしい」と。左・中／写真提供／佛子園

目指したんです。

——その後のプロジェクトを拝見しても、建築に対するこだわりや造詣の深さに驚かされます。

雄谷　もともと絵を描いたり、図面を引いたりするのが好きなんです。建築関係の本も、たくさん読みましたね。初期の福祉施設はどれも「こういうものをつくりたい」ではなく、「施設とはかくあるべき」の論理でつくられていました。たとえるなら病院のような冷たい雰囲気で、そこで暮らしたいとか、働きたいと思えるような場所ではなかった。「日本海倶楽部」も、本当はもっと先へ進み、近隣の町に施設を点在・分散させるアイディアがあったのですが、実現できず諦めました。でも、この取り組みを通じ、自分たちの希望を実現するために話し合いのできる建築事務所を探し、法律や規制と折り合いをつけるノウハウや経験が身についたと思います。

無住の寺の再生に始まった「ごちゃまぜ」の実践

——今の佛子園を語るうえで、2008年に小松市北部で開設した「三草二木（さんそうにもく）　西圓寺（じ）」［＊1］は欠かせません。障がい者の就労継続支援、地域住民のよりどころである温泉やカフェ・酒場、野菜や手作り品の直売所など、いくつもの機能を兼ね備えたユニークな施設ですが、もとは廃寺寸前だったお寺の将来について相談を受けたのが始まりだったそうですね。

雄谷　人口減少が急激に進む地区でしたので、檀家さんも離散して新しい住職も見つからない。スタッフと障がい者が定期的に掃除を行っていたところから、次のステージへ進むことになりました。お寺というのは集落の中心にあり、先祖たちが時代とともに心を通わせてきた場所。もともと、いろんな世代が「ごちゃまぜ」で関わり合っていたと言えるでしょう。障がい者だけでなく、子どもや老人も含め幅広い人が使える場所にしたいと考え、一切の制約を設けないフリーハンドでリノベーションしました。

——初めて建物を訪れた人は、あそこが福祉系の施設とは思えないでしょう。お寺という建物がもっていた力もあるのでしょうが、集まった人が皆自然にくつろぎ、楽しそうに見えました。洒落た心地よい空間であると同時に、誰に対しても開かれた場という理想が心に染み入ってくるような驚きを感じました。

雄谷　あれは、つくろうとしてもつくれる施設ではない、そう私も思います。そもそも、玄関から入るとバリアフリーにもなっていないですからね（笑）。お寺の建築様式からするとしかたないのですが、フラットにすると雰囲気が壊れてしまう。そこで、スロープを裏手に設ける仕掛けにしたり、全体としては人が人を助けながら、さまざまな問題をクリアしていくという考えでデザインされています。福祉予算でイチからつくったら、あのような施設はできないでしょう。行政も、非常に弾力的で包容力のある対応をしてくれたと感じています。

　たとえば、温泉では足湯から本堂の天井が見えるように設計しました。今は亡くなった90歳を超える認知症のお年寄りがそれを見て、子ども時代を思い出したそうです。心理療法に「回想法」というのがありますが、自分が元気だった頃にふれた映画、音楽、食べもの、建物、そのひとつひとつが人を元気にするのだと思っています。

——そんな場所だからこそ、認知症の人が障がいのある人の世話を焼いたり、その逆もあったり、予期せぬ出会いや関係が生まれるのだと感じました。それが互いの喜びや自信につながり、過疎地域で世帯数・人口が増えるという奇跡まで起きました。「三草二木　西圓寺」には、子どもたちもたくさん集まってきますね。

雄谷　開設から15年が経ち、小学生の頃に通っていた子が福祉を学び、佛子園の職員になった例もあります。その子にとっては「ごちゃまぜ」が当たり前、「こういう場所で自分も働きたい」と言ってくれた。いわば地域との関係性からリクルートも行われているのです。ありがたい話ですよね。

皆が一緒に、同じ体験を通じ支え合うことこそ大切

——そうした「ごちゃまぜ」の発想を、「福祉を核としたまちづくり」へと展開したのが「Share（シェア）金沢」ですね。2014年に金沢市郊外にオープンし、地方創生を掲げる政府も「生涯活躍のまち（日本版CCRC［＊2］）」の先進モデルとして注目しています。2016年には佛子園の本部がある白山市に、障がい者就労とデイサービス、保育所までを備え、これまでの先進的な試みを凝縮した複合施設「B's行善寺（ぎょうぜんじ）」もできました。新たな試みが、次々に実践へつながっていると感じます。

雄谷　私自身、佛子園の規模を大きくしようと思ったことは一度もないんですが、必要なものを必要な折につくっていったら、そうなっていました。ニーズや課題は地域で異なりますが、共通しているのは「一緒にいること」で地域が豊かになっていくという点。社会が消費を先行させ、効率を重視した時代には、福祉もタテ割り化が進みました。高齢者は高齢者だけ、障がい者は障がい者だけで集める。地域が元気な時は、そうしたやり方も機能したのだと思いますが、今は家に帰っても核家族だったり、高齢者も独居世帯だったりと、まったく人と人が交わらない社会になっています。そこでは、とにかく一緒にいるというだけで、大きな意味と価値が生まれると思うのです。

——住民参加を重視する、青年海外協力隊のPCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）［＊3］も取り入れておられますね。

雄谷　途上国の支援でも同じですが、病院や福祉施設によくある勘違いは「支える側、支えられる側」という線を引いてしまうこと。支える側と思っている専門家は、すべてを自分たちの力で解決しようとします。そうではなく、どこに問題があるか一緒に考え、地域の人が中心となって課題を解決する。それを、黒子として支える観点が大切です。

　福祉の仕事はストレスも多いし、行き詰まってしまうスタッフもいます。そんな時、利用者や地域の方が声を掛けてくれることで救われたりします。支える側と支えられる側が相対するのではなく、「一緒に食べよう」「お風呂に入ろう」と同じ方向を向いた方が楽しい。逆に、利用者にとっても「どうしました？」「お手伝いしますよ」などと一方的に言われると、「自分もついにこっち側か」と元気をなくしてしまうことが多いんです。

——「シェア金沢」では金沢大学とも連携しながら地域課題の解決を進めておられます。「B's行善寺」では、温泉やカラオケルーム、ブータン産の手打ち蕎麦が名物の食事処に加え、おしゃれなカフェやキッチンスタジオ、フラワーショップを併設。小松や輪島と同様の福祉・リハビリも兼ねた本格的なジムに加えてプールもある「ゴッチャ！ウェルネス」やクリニックも備え、幅広い年代の近隣住民の利用を重視していますが、施設内に「住民自治室」があることにも驚かされます。

雄谷　地域との間にいい関係性とプロセスがあれば、何か問題が起きても佛子園に文句を言うのではなく、どうしようかと一緒に考えてくれるようになるものです。住民が「自分たちの場所」と感じてくれることで、たとえば「B's行善寺」でも、コロナ禍において徹底して消毒作業に協力していただけました。すごくうれしかった

「ごちゃまぜ」の思想をそのまま表したような案内板、今日はどこへ行こう？「B's行善寺」はまた、周辺の複数の小規模グループホームのネットワークの拠点ともなっている。

ですね。

サードプレイスとしての空き家・空き地がもつ力

——既存のコミュニティと協働して、「ごちゃまぜ」の場所をつくる。こうしたアプローチは空き家・空き地の有効活用という視点から見ても、非常に有効と感じます。それを目に見える形で実現したのが、2018年に輪島市でオープンされた複合型の地域共生施設「輪島KABULET®（カブーレ）」ですね。

雄谷　輪島市は急激な人口流出が進み、市の中心部にも多くの空き家があります。夜は真っ暗となるそんな場所に「明かりを灯していく」という感覚が基本となっているんです。人が住まなくてもいい、たとえば廃業したスナック跡を観光客向けの自転車置き場にして、夜は明かりをつけるとか。それだけでも、まちの風景は変わっていきます。

——飲食店や温泉、住民自治室を設けた拠点施設の周辺に、健康増進施設やカフェ、サービス付き高齢者向け住宅、障がい者向けのグループホームなどの福祉施設がいくつも立地していますが、その多くが空き家を活用したものですね。

雄谷　街並みに馴染（なじ）んでいるという意味で、やっぱりいいですよね。新しい建物ができると「何かが完成した」と思われがちですが、まちづくりはもっと長いスパンで地域が「発酵」していくことです。とりわけ、そういう化学変化を起こすのは「誰がいてもいい場所」、つまりサードプレイスだと私は思っています。

——単純に住む場所と仕事があればよい、という話ではないんですね。「輪島カブーレ」ができることで、人と人が結びつくだけでなく、地域がもつ多様な力に光が当てられているように感じます。

雄谷　たとえば近所の人が、長く引きこもっていた中高年の男性を連れてくる。彼はそこで障がい者や老人、子どもたちがのびのびと過ごす様子を目の当たりにし、「ここでなら働けるかも」と感じはじめる。これは、私たちの福祉がうまく機能しているのではありません。いろいろな人のいる場所からエネルギーをもらい、地域の一員として暮らす居心地のよさを感じている。そんな、社会保障の枠組みを離れた助け合いが、すごく効いてくるんです。

あるいは、風呂あがりにビールを飲みながら「あそこに空き家がある」という話をしたり、「じゃあゲストハウスをつくろうか」とか、口がすべって言い出しっぺの人がそのままやることになっちゃったりする（笑）。住民のなかからも、そんな元気のいい話が聞かれるようになっています。

——新たな居場所ができることで、まち全体に活力が生まれてくるのですね。

雄谷　最近、面白いことがありました。ある障がいをもつスタッフが、館内で走り回っていた子どもを注意したんです。何度か注意した後、また騒いでいる子どもにコップで水をかけたのだそうです。それを子どもが家で母親に話し、教育委員会まで伝わった。そして教育委員会は「もうトラブルが起きないよう、ゾーンを分けた方がよいのでは」と言いはじめたんです……。

ところが、今度は商工会議所の皆さんが「子どもたちにはちゃんと注意すればいい、せっかく面白い拠点ができてうまくいっているのに」と言い出した。そのように、コミュニティの当事者それぞれが話し合い、共に解決策を見出していく。誰かが誰かを支えるだけだったり、判断をすべて委ねてしまったり、そんな一方通行ではない関係性が生まれつつあるのを感じました。

まず縁側を開け、お茶を一服 すべてはそこから始まる

——「輪島カブーレ」では、青年海外協力隊の元隊員たちとの密接な連携も大きな力になりました。公益社団法人青年海外協力協会（JOCA）［＊4］の会長も務める雄谷さんは、輪島からこのモデルを「全国展開」していこうとされています。

雄谷　東日本大震災の支援で私たちが学んだことのひとつは、仮設住宅に入居した人々、とりわけ独居高齢者や障がい者の苦難でした。一番困っている人が誰なのか、それを教えてくれるはずのコミュニティから切り離されることで、支援に必要な情報が得られないケースが多かったんです。道路や橋の「国土強靱化」がしばしば言われますが、互いの気配を感じ、つながって暮らすコミュニティの強靱さがいかに大切か、身にしみてわかりました。

あれから12年が経った今、JOCAでは宮城県岩沼市で、仮設住宅があった場所を拠点に新しいコミュニティづくりにも取り組んでいます。ほかにも鳥取県南部町、広島県安芸太田町などで、JOCAの帰国隊員と連携した地方創生推進プロジェクトを進めています。「ごちゃまぜ」のまちづくりは、ちょっとしたムーブメントになっていく期待があります。

——すごいですね。元協力隊員は世界中で現地のコミュニティに入り、いわば「あるもので組み立てる」というノウハウを実践してこられた。空き家・空き地も同じ意味で「すでにあるもの」としての資源だと思います。

雄谷　その通りです。家や土地に思いをもっている人たちは、必ずいる。ものを壊してつくるのではなく、そうした思いを紡いでいくことが大切だし、すごく豊かなことだと思いますね。

——それが世代を超えつながっていくことは大きな希望です。お話を伺いつつ、これからは単に福祉の枠にとどまらない「ケアの関係を基軸にした地域づくり」が重要になる実感を覚えます。最後に、空き家・空き地を活用したまちづくりを考えるうえで、雄谷さんが特に大切と思われる点についてお話しください。

雄谷　いろんな人がいるから面白いし、いろんな人がいれば問題も起きるのが当然です。だからこそ、基本はやはり人が人を敬い、慈しみ合いながら関わっていく。それをベースに、物事を考えていくことが大切だと思います。

そこに空き家があるなら、まずは縁側を開けて、そこで「お茶でも飲みますか」というところから始める。一杯のお茶やコーヒーを一生懸命に淹（い）れ、「ありがとう」と言ってもらえる。「三草二木西圓寺」も助成金がついて温泉ができる前は、そんな感じでした。お掃除をし、お茶を飲み、夏はスイカも食べました。

——とても腑に落ちるお話です。施設の成功について語る時も、そうした本質をつい見逃してしまいがちです。

雄谷　よく「なぜ佛子園は、飲食事業もうまくいくのか？」と聞かれます。現代の消費社会においては、美味しいもの、面白いものをつくって人を集めようとするのが当たり前とされています。でも昔は、お寺の法要や神社の祭りがあり、人が集まるから一緒に食べたし、ものを買った。それが本来の消費なのに、今は順序が逆になっていると感じます。お蕎麦にしても、同じ味なら大勢の人と食べる方が美味しく感じるでしょう。私たちは「ごちゃまぜ」に人が集まる場をつくっているだけ。人が集まることで、そこには大きな力が生まれてくるのです。

——さまざまな人が集まり、そこに生まれる〝何か〟が地域の新たな可能性を拓く。空き家や空き地は新しい絆や活力が育まれる場所として、今こそ見直されるべきだと実感できました。本日は貴重なお話を、ありがとうございました。

上／2018年4月の「輪島カブーレ」オープン時には、多数の関係者や来賓、報道陣が集まった。下／佛子園と連携するJOCAのメンバー。「輪島カブーレ」にて。写真提供／佛子園

注

＊1 「三草二木」とは法華経にある言葉で、仏の慈悲が育ち方の異なる大小さまざまな草木に、降り注ぐ雨のようにあまねく注がれていることを示す。

＊2 Continuing Care Retirement Community の略で、高齢者が健康な段階で移住・入居し、終身で暮らせる生活共同体のこと。

＊3 開発援助プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを、一貫して管理運営する手法。計画段階での、関係者分析、問題分析、目的分析、プロジェクト選択の4つのステップに特徴がある。

＊4 1983年に発足した内閣府認定の公益社団法人。開発途上国の人々のために、自分のもつ技術や経験を生かして活動してきた青年海外協力隊の帰国隊員を中心に組織されている。

雄谷良成（おおや・りょうせい）
社会福祉法人佛子園理事長、公益社団法人青年海外協力協会会長、一般社団法人 生涯活躍のまち推進協議会会長、日蓮宗普香山蓮昌寺住職。1961年、石川県生まれ。金沢大学教育学部卒業後、特別支援学級の教員を経て、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国に派遣。その後、北國新聞社勤務などを経て、佛子園へ「星が岡牧場」「日本海倶楽部」「三草二木　西圓寺」「Share 金沢」「B's 行善寺」「輪島KABULET®」といったユニークな社会福祉施設の開設を牽引し、注目を集める。金沢大学非常勤講師。『ソーシャルイノベーション 社会福祉法人佛子園が「ごちゃまぜ」で挑む地方創生！』（ダイヤモンド社）の監修を務める。